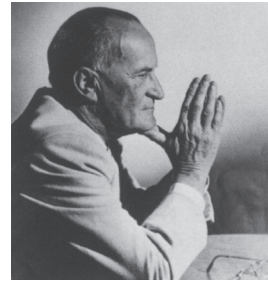


アントニン・レーモンドの 「リーダーズ・ダイジェスト東京支社」

—RD「構造論争」・再考— そして、ル・コルビュジェの影響

松野高久 (環境デザイン研究所)



アントニン・レーモンド (1888-1976年)
(Raymond in the early 1950s)

戦後の1946年5月に創刊された、アメリカの月刊誌『リーダーズ・ダイジェスト』の日本語版は、当時で出版部数は毎月50万とアメリカ文化の象徴であった。その東京支社の敷地は皇居の北側の清水濠に面する内堀通りを前面として竹橋のほとりであり、戦後RD社(註:レーモンド建築事務所でも「リーダイ」、RDと略して呼んでいた)が購入した。その竹橋の反対側に現在、谷口吉郎設計の東京国立近代美術館(1969年)がある。RD社の設計は、アントニン・レーモンド&ラディスラフ・L・ラド、構造はポール・ワイドリンガーにより、基本計画はニューヨーク、詳細設計は東京で行われ、実施設計と監理のため、この敷地内に杉の足場丸太を「鉸状(シザーズ)〜トラス」で組んだ現場小屋事務所を建てた。その「鉸状トラス」工法は後に、西麻布の弁町の自邸と事務所として再現された。ランドスケープ(造園)と彫刻はイサム・ノグチで施工は竹中工務店であった。(図1-A・B)

A・レーモンドはRD東京支社建設について『自伝 アントニン・レーモンド』(三沢浩訳 1970年 鹿島研究所出版会)に書いている。この『自伝』はA・レーモンドが80歳の時、1968年に毎年恒例の最終となった軽井沢の新「夏の家」(新スタジオ)つまり、別荘兼アトリエ工の時に著述していた。米国のニューホープの自邸に帰国する4年前のことである。この年にレーモンド設計事務所に入所した私は、その軽井沢行に北沢興一氏、矢島開氏と共に3名の中に選ばれ、約1カ月半の間、アトリエでA・レーモンドとはスタジオで顔を合わせた、所員は別棟の小屋で宿泊していた。時々、東京から事務所の役員や所員他が訪れて来た。そこでは所員は長野県S市の庁舎の基本計画を作成していたが、A・レーモンドはこの『自伝』の執筆と陶器づくりの毎日で、建築家人生の最後のワークのようであった。その『自伝』の「20. リーダーズ・ダイジェスト東京支社」に、

その敷地は濠に面した美しい場所で、竹橋と皇居の石垣と、美しい城門(註:平川門)の一つに対していた。・・・RD社が完成した時、封建日本の技術の典型である魅力的な城門が、最も現代的なアメリカ技術の典型と向かい合ったのである。その両者が、共通の永遠の原則に従って、デザインされ、建築されているのを一望に見るのは感慨深いものであった。・・・

RD社の建物のデザインに当たり、私は日本人の正しい方位観の尊重や、自然への親近感、それに基本的なものから自身を隠してしまわないように、材料を自然状態のまま用いるなど、日本人の気持ちを念頭においた。そのほかに私に示唆した日本の原則は、極度な単純さと奥ゆかしさ、材料の経済性、軽さと優雅さであり、重量感や、部厚さや、虚飾よりは、むしろほとんど透明に近いものであった。(傍線筆者)

A・レーモンドは日本建築の特徴である「単純さと経済性、軽さ、透明性」を主張している。アメリカのモダニズムの建築など、まったく言及していない。しかし、「RD社、新社屋の意図」(『リーダーズ・ダイジェスト』1951年7月)において、

この建物に対する、アメリカの貢献も少なくなかった。構造、機械、衛生、電気等の最新の技術、コンクリートを調節する科学的方法、維持を経済的にし、運営を簡易にするいろいろな新発明、その他見えない光源による十分な採光、床下の配管網、熱ポンプ等の実用的施設などである。この二つの文化の最上の建築設計の融合は興味深い建物を産み、相異なる文化の調和が互いに有利な結果をもたらす得ることを示していると思う。(傍線筆者)

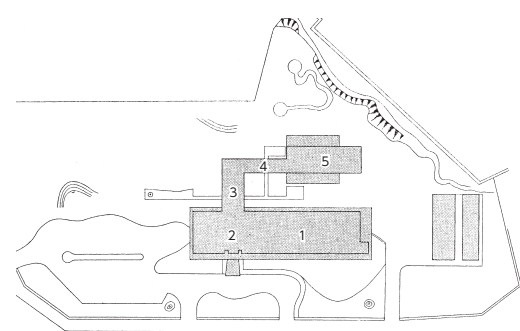


図1-A RD東京支社 配置図 (出典:『建築文化』1951年9月号)
1 事務室 2 ホール 3 展示室 4 ラウンジ 5 カフェテリア

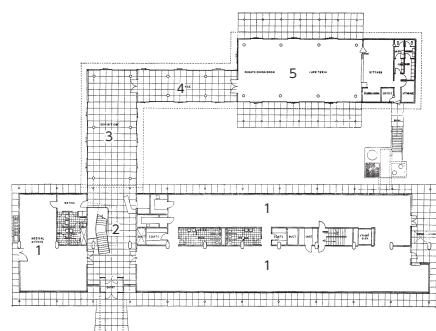
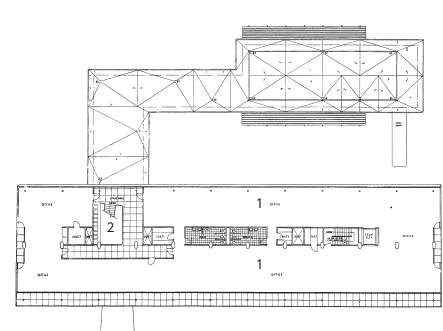


図1-B RD東京支社 1階平面図
1 事務室 2 ホール 3 展示室 4 ラウンジ 5 食堂



2階平面図 (出典:『国際建築』1950年9月 美術出版社)

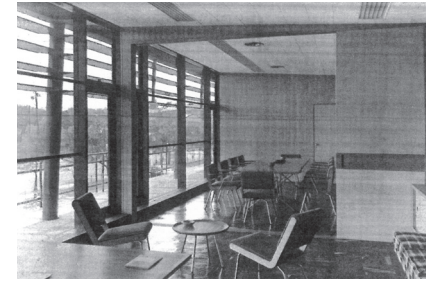


図2 RD東京支社 マネージャー室と会議室 (出典:『アントニン&ノグチ・レーモンド』 神奈川県立近代美術館 編/丸善/2007年)

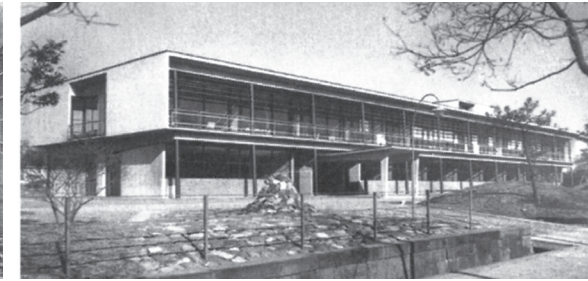


図3 RD東京支社 南面全景 (出典:『A・レーモンドの建築詳細』三沢浩 著/彰国社/2005年)

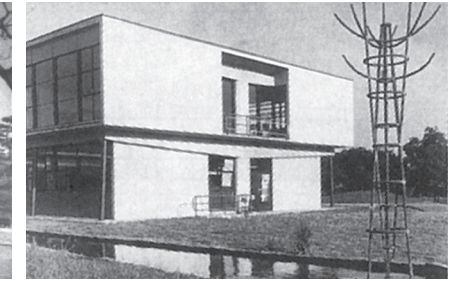


図4 RD東京支社 西側妻側外観 噴水塔はイサム・ノグチ作 (出典:同左)

つまり技術はアメリカによる、A・レーモンドの言う「米・日両建築技術の融合」であり、「A・レーモンド&L・ラド」はパートナー事務所であり、構造・設備担当を置いて、機械設備はモリス・シャピロ、電気はクロード・エンゲルJr. に協力させている。構造はニューヨークの同じビル内の事務所のポール・ワイドリンガーが担当している。

A・レーモンドがデザインの目的としたのは「民主的、人間的であり」とするが、それは具体的には「RD社の中で働く人々が皇居の壕端の美しい緑とその景色を、遮るものなく見られることを狙いとした。」(図2)

この敷地は4,000坪で東西方向に走る内堀通りに面して長手方向とし、清水濠を南に、北に日本橋川が流れている。再訪してみると皇居の堀割の対岸の石積みは比較的に低く、江戸時代の面影を今も湛えている。平川門の白壁も水平に低く、瓦葺屋根も低く総てが水平で垂直線はない。A・レーモンドがRD東京支社を低層で横長の建物としたのも、この敷地と環境への融合にある。(図3)

2階建てで東西方向に長い事務室棟(第1ウイング) 59.5m×16.4mと、ラウンジと展示室を通して、1階建ての食堂棟(第2ウイング)が中庭の池をはさんで接続している。A・レーモンドはこの敷地とは既に関係があった。『自伝』に、(図4)

敷地は1923年の関東大震災以前、フランス大使館によって占有され、亭々とした樹木や立派な石、小さい社のある、古い美しい庭園の中心に、ややおっとりとした建物があった。その建物は地震によって燃え落ちてしまい、そこに私は、有名なフランスの詩人で友人のポール・クローデルを大変喜ばせた、小さな仮の大使館の建物を建てた。その後、フランス大使館が現在の場所(麻布)に移ると、美しい庭はあとかたもなく壊され、無気好な外国語学校が建てられた。これも戦争中に破壊されてしまった。こうして私は天災、火災の二つの大災の後、同一敷地に二つの建物を手がけることになった。両者とも建築的には実に重要であった。その竹橋の敷地は、戦前の東京の都市計画により公園に指定されていた。私はそれを知らなかったが、もし知っていたら、この敷地を獲得しようとはしなかったろう。いったん敷地を得たからには私は建物を庭の中において、何かル・コルビュジェの「輝く都市」のように、将来の都市計画の模範となるようにつとめ、ハンサムな橋や、皇居への通用門などと張り合うのをさけようとした。(傍線筆者)

ここでレーモンドは重要なことを言っている。ル・コルビュジェの「輝く都市」の模範となるような建築を作りたいと環境への融和を言っている。

ル・コルビュジェの『輝く都市』は1947年にパリで出版され、その日本語訳は坂倉準三により1956年に丸善で出版された。この都市計画の考え方は彼の「輝く都市」理論の解説であり、あらゆる人間に「物質的にも精神的に申し分のない最上の生活条件」を見出すためのものである。そして、「とにかく現代の様式が存在しているのだ。近代社会の視点の変化は多くの技術的発明 — 即ち強度の計算と、鋼鉄および鉄筋コンクリートの使用 — に起因している。・・・鉄筋コンクリートは、性質の全く逆な異質の材料(鋼とコンクリート)を一緒にして、ひとつの物体に働く二つの相反する力、即ち引張り(力)と圧縮(力)にも耐えられるようにしたもので、最新の技術の中でも最も微妙で最も経済的なものである。」と、それを具体的に説明している。(註:以下、太文字もル・コルビュジェ自身による)

- (1)鋼鉄または鉄筋コンクリートで独立した骨組みを作るのであるから、現代様式の第一の特徴は、**軽快さ**ということになる。
- (2)透明または半透明のガラス板の使用により、その性格の特徴は、**光と明るさ**ということになる。・・・緑の樹木や芝生に囲まれた小さな邸やアパート、或いは近い将来に表れるであろう**事務所**など。
- (3)鋼鉄と鉄筋コンクリートの強度の正確な計算は、高度に**むだを省く**ことを可能ならしめる。
- (4)ひとつの建物全体をいわば本当の生命の科学たらしめ、(支えとなる骨組み、風通しのよい明るい空間、栄養補給、更に種々の<役に立つ>配線、配管の設備—水道、ガス、電気、下水、暖房、換気装置など—)かくして建物は**充足感**を与える。
- (5)建物の中に取り入れられたこれら多くの新しい条件が、調和よく交響的にそれぞれの機能を動かしているということは、その出来上がった建物に、**簡潔と正確**という立派な性格を付与する。
- (6)総て鉄筋コンクリートの技術が極めて自然に提供してくれる(大柱、小柱、大梁、小梁、平らな天井、粗壁等々)鉄筋コンクリートの初期に支柱と梁の緊結方法が実現され、<持送>なしで済むようになって以来、鉄筋コンクリート板の**直角的**性格はその**純粋さと方正さ**においていよいよ際立ってきている。



図5 南面2階バルコニーの斜柱
(出典:『新建築』1951年9月)

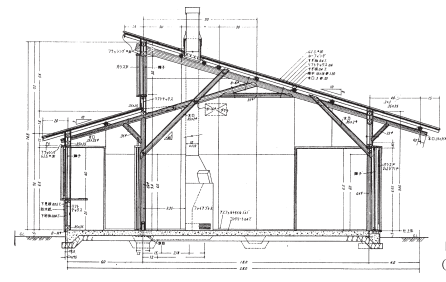


図6 全体透視図(1950年レーモンド加筆)
(出典:『A・レーモンドの建築詳細』三沢浩 著/彰国社/2005年)

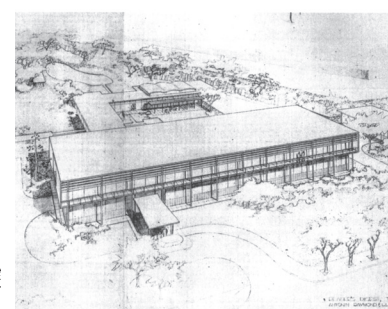


図7 西麻布の自邸・アトリエ
(出典:『建築』1962年4月)



図8 クラドノ市のA・レーモンドの生家
(土屋重文氏 提供)

- (7)現在ではすんなりした僅かばかりの鉄筋コンクリートの支柱に場を譲った。それが最初に世に現れた時は、誰もがそのようなものでは決して支えるという感じを与えることができず、観る者を十分に安心させることができないと信じた。
- (8)内部への水はけを備えた平屋根が、建物の覆いとして正常なものである。防水の役目を果たし、危険もない。特にそこは庭園を育めるならば、コンクリートや鉄の膨張という非常に恐ろしい結果を未然に防止することになるであろう・・・立面をガラス面にした場合の保護方法については、新しい設備、即ち日除け(ブリーズ・ソレイユ)の役を果たしてくれる。それはまた同時に雨除けにもなりその使用者が自由に使うことができる珍重すべき補足である。

そして、ル・コルビュジェは以上をまとめて「現在都市計画のために用いられている革新された建築とは以上のものである」と総括している。それがA・レーモンドが竹橋の敷地で脳裏に描いた『輝く都市』の「革新された建築」で正しくRD東京支社に適用されたことに私は驚愕した。またそれは「次の引用からわかる」とA・レーモンドが『自伝』に書いたのは、

建築家オーギュスト・ペレーは言った。「ひとつの建築が美に到達するのは、真理の輝きによる。」「構造は建築家の母語である。建築家は構造を通して考え、自分を表現する詩人である。」「建物のいかなる構造部分をもかくす者は、装飾を自ら奪いさっているのだ。柱を覆うのは誤ちを冒すものであり、偽りの柱を建てるものは罪人である」と。(傍線筆者)

このペレーの言葉を引用して「偽りの柱」などと、常にA・レーモンドはRD東京支社の建築主旨を語っている。それと同時に、日本建築にも原点があったとも書いている。「日本建築に就て」(『アントニン・レーモンド作品集・1920-1935』前川國男訳城南書院発行 1935年)にA・レーモンドは、日本住宅の気候との関係性について、

住宅は通常南風に向かって全部開放され夏の涼しい微風を受け入れ、冬は唯一の暖房熱源である低い南の陽ざしを受け入れる様に

設計されている。徹を防ぐために北側には風通しを助ける窓も設え同時に日陰する庭を楽しむ。我々の設計になる家に総てこの合理的なこの土地の伝統に従って計画されている。日本人の自然愛好癖は非常なもので我々西欧人の想像つかぬ大きな犠牲を之がために払っている。庭と家とは一つの「全体」を形づくり、庭は家の中に入り込み、家は叢を這う蛇のように庭を遡る。西洋風の、庭園と隔離された住宅は日本においては全然不可能である。・・・二階の居間から遠い地平を望むのみでは日本人は不満足である。たとえわずかに膝を容れるに足る庭であるにもせよ雨水の流れ滴る岩や葉影を眺め得られる湿った土が欲しいのだ。こうして彼等は居ながらにして思いを千里の山野に馳せる。

A・レーモンドはRD東京支社をイサム・ノグチ設計の庭園を含めて、全く日本住宅の概念で設計していたことがこの日本建築論で解る。このRD東京支社の南面と北面のデザインは異なっていて北面には水平ルーバーはない。以上考察してきたように、それはモダニズム建築を目途したのではない。それが結論である。(図5、図6)

1. A・レーモンドと「モダニズム近代建築」

RD東京支社は戦後のモダニズム建築の先駆とされている。しかし、A・レーモンドは「真のモダニズムに向かって」(プリンストン大学建築学科における講演1942年『私と日本建築』三沢浩訳 鹿島研究所出版会 1967年)には、「モダニズム建築」を「近代建築」ではなくて「現代建築」としている。A・レーモンド主張するのは「モダン・アーキテクチャー」であり、「現代建築」と訳され、一般的には「モダニスティック(近代的な)・アーキテクチャー」と言い換えるべきであると、「モダニズム(近代主義)建築」つまり「近代建築」とは言い分けている。A・レーモンドは、「モダニスティック」とは、「形態が機能と結びつかず、材料が必然性をもって、使われないところから出てくる誤った概念である。これは単にデザインの一つの傾向であって、過去の多くの流行と何ら異なるところはない」と、定義している。A・レーモンドは歴史的な意味でいうインターナショナルの「モダニズム主義」は、A・レーモンドの意に沿わなかったと三沢浩は書いている。

この米国での講演は次で始まる、

モダニズムという言葉は、あなた方を捕らえるための罠である。…当初からはっきりと、わかり易くしているように、私はあなた方に足払いを掛けるつもりでいるし、現代建築が極めて偽りのないものであり、望まれているものであるという事実を作ろうとしている。また同時に、すでにだまされて、新しい情熱をもって、ついて行くだらうということも望んでいる。・・・過去を結びつけている薄いヴェールをはぎとって、今や次第に数を増して前進する、若い人々の群れに加わろうではないか。それこそ、率直、単純、創造的な建築への道である。参加しないならばたちまち遅れてゆくことであろう。強いものは前に進む力なのだ。ル・コルビュジェはかつて「現代建築はその生き方である」といった。(傍線筆者)

このル・コルビュジェへの言及がA・レーモンドの「モダニスティック(近代的な)建築」である。それは「現代生活の特殊性」としての「自由の価値に対する感覚」である。それをより詳細に、

どうしたら、現代建築は、われわれの現代の生活様式に適應するのであろうか。それは「自由」そのものである。・・・古い比例、頑固な釣り合いなど、古いしきたりを考えることなく、自由の因習に対抗する力を見出すのである。・・・何が私のいう現代建築であるのか。「現代的スタイル」の名の許にやってきた、偽りの美学とは、全く関係のないことを理解してほしい。・・・現代建築とは、このように他ならない。かかる現代建築の問題提起こそ、あなた方の問題である。・・・あとからあとから、疑いもなく新しいスタイルが取って代わる。モダン、現代的建築、いかように呼ばれようが、現代建築は、今日いわれるような、スタイルではない。観念的思想による考えではなく、また売らんかなの商人達の作った流行でもない。・・・そのような根拠のない幻想によって生み出された、もうひとつの似通った幻想ではない。(傍線筆者)

この考えを基にしてA・レーモンドにとっての「現代建築」について、三沢浩は『私と日本建築』(A・レーモンド、鹿島出版会 1967年)の「時間と建築・レーモンド小論」に、

モダンつまり現代は、永遠に続く時間の中で一瞬(ひとくぎり)に過ぎない。人間の目的への永い闘争の一定時間に過ぎない。普通にいわれるモダニズム、つまり現代主義は、その場限りの流行に過ぎないということを、レーモンドはしばしば唱えている。芸術の機械化とか、抽象化とか、バウハウスのおきかえようとしている現代芸術の姿が、現代主義のひとつの表現であると、彼は信じてきた。単なる反ゲルマンの依怙地が反目させたのではない。現代の一時期であろうと将来の一時期であろうと、民族、或いは人間全体が、ひとつの目的に向かって凝縮し創造しようと懸命になる時、建築は

初めて期待に背かない、そのように常に考えていた彼は、ひとつの建築に向かって期待をし、賭けてきたのである。(傍線筆者)

2. A・レーモンドのチェコの生家

A・レーモンドは「モダン」や「モダニズム」という言葉を嫌っていたから、その同時代建築は「現代建築」(モダニスティック)とされ、「モダン」という「スタイル」からは次々と消費されてしまふ建築しかできず、「モダニズム」という「イズム」の建築を知らず知らずのうちに硬直化してしまう畏れがかくされているという主張である。

A・レーモンドは、当時オーストリア帝国ボヘミア王国のクラドノ(現在、チェコ共和国)に生まれた。ある時、レーモンド建築設計事務所の役員がその育った場所を実地に訪れてみると、『自伝』に書かれた「クラドノの家は醜悪な2階建ての街の広場の角に面していた。」以下の記述からそこはゲットーであったとの証言から、A・レーモンドはユダヤ人であると事務所では思っていたが、三沢浩はユダヤ人ではないと言う。単にナチスがチェコを侵略し、併合した事実以外の理由は判らないが、しかしレーモンド設計事務所は当時から週休二日制で土日は休日であったが、土曜日に一人出社していた私にA・レーモンドはオフィスにいる私の横にブランデーグラスを手に持ちながら来て、「家に帰り勉強しなさい。もしくは家族と共に過ごさなさい」と話しかけた。(図7)後で判ったが、ユダヤ人は土曜日は安息日で、労働はしなかったことに私は気がついた。三沢浩氏も同種のエピソードを書いていることを思い出した。三沢氏は、それを「アメリカ風の考え方である」としている。A・レーモンドのチェコへの愛国心と反ゲルマン主義は、W・グロピウスの主宰したバウハウスの建築への嫌悪となった。しかし西麻布のアトリエの上部の壁には、W・グロピウスが1954年の5月19日に来日した際に、訪れた「ディス・イズ・ジャパン」の編集長で、建築家の斎藤寅郎などの同行者との写真がアトリエの上部の壁に掲げられていたのを私は思い出す。しかし「伝統的にゲルマンにしいたげられてきた、汎スラブ系のチェコ人の血は、ゲルマン系の芸術を受けられなかった」(三沢浩)のである。

レーモンド建築設計事務所の友人の土屋重文氏は永年にわたりA・レーモンドの出自の研究を続け、生誕地であるチェコのクラドノ市の学芸員の調査結果を紹介してくれた。東欧の民主化の後、レーモンドの戸籍も発見され、結論としてユダヤ人であることが再確認されている。誕生した地はクラドノ市の中央広場のある教会の反対側に面していて、レーモンドの『自伝』に、「醜悪な2階家だ」と書いている共同住宅の2階の1部が生家であった。(図8)レーモンドは6人兄弟(男5人女1人)で、総てナチスのアウシュビッツの収容所に護送された記録も見つかつていて、そこで死去している。A・レーモンド1人のみがアメリカに逃げる事ができた。その罪悪感からか一度もアメリカか



図9 内部・展示室
(出典:『アントニン・レーモンドの建築』三沢浩 著/彰国社/2005年)



図10 外から見た食堂
(出典:同左)



図11 内部・透明なオフィス
(出典:同左)

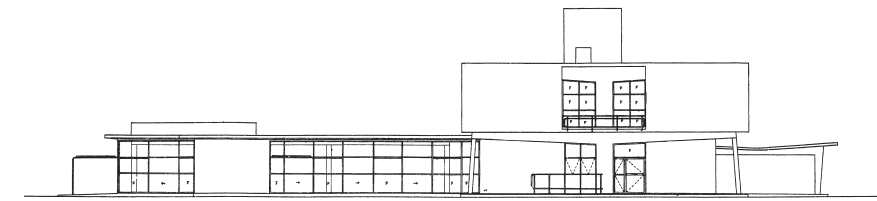


図12 西側立面 (出典:『国際建築』1950年9月)

執筆者プロフィール

松野 高久(まつの・たかひさ)
1944年東京都浅草に生まれる。1968年東京工業大学理工学部建築学科(清家研究室)卒業。同年、株式会社レーモンド建築設計事務所入所。建築設計の傍ら1997年第1回長塚節文学賞・最優秀賞「矢を負ひて露れし白き鹿人—長塚節臨死歌考」を受賞。1993~96年日本工業大学建築学科非常勤講師。「長塚節研究会」の常任理事。2005年株式会社環境デザイン研究所入所し現在に至る。
主な著書に『ロゴスの建築家 清家清の「私の家」そして家族愛』(明文社 2018年)がある。
2020年に谷口吉郎建築論を出版予定。

ら祖国に帰ったことはなかったという。したがって「日本とドイツの全体主義国家の戦争を止めさせようとした。米国民としての義務もある」と、土屋は書いている。(『日本経済新聞』「文化」2017年6月8日)レーモンドは新旧派のキリスト教会も多く設計しているが、自身は無宗教で日曜日自宅を過ごしていた。

A・レーモンドがユダヤ人であったことが、彼の建築を理解するのに重要であると私も考えている。

A・レーモンドがアメリカに帰国した戦中の1939年に、ニューヨークでパウハウス展が近代美術館で開かれたが、その講演会でパウハウスを悪罵していたのである。

その「モダニズム建築」をA・レーモンドは何から学んだのであろうか。『私と日本建築』(A・レーモンド 鹿島出版会 1967年 三沢浩訳)の「建築の根本原則」(1953年)には、

私は、現代建築を創始した建築家の一人である。けれども私自身、自分が本当に現代建築の先頭を歩んでいることを知らなかった。私は、日本の建築から教えられ、啓発されたところに従って、根本原則の実現につとめてきただけのことである。私に現代建築の原則を教えてくれたのは、日本の建築であった。 (傍線筆者)

そのA・レーモンドの現代建築の原則を次の五原則としたのは、長年A・レーモンドのアシスタントで、「群馬音楽センター」(1961年)を担当した東工大の先輩の五代信作氏で、それは、

建築は、simple,natural,economical,directそしてhonestでなければならない

この五原則(プリンシプル)は私もレーモンド建築設計事務所時代に、よく聞かされた。この考え方は、RD東京支社に全くよく適合している。その『私と日本建築』(同書)「日本建築について」(1935年)の冒頭に、

日本で仕事する外人建築家には、一つの特権がある。現代建築の目標として再発見された基本的原則が、日本建築や文明の中で、具体化されていくのを眼前に見られるからである。西欧では、深く根を張る唯物主義が邪魔をして、この純粋な原則にまだ気がつかず、精神構造ばかりが追求されている。これらの原則は、日本の

古来の建築の中に、きわめてはっきりと表現されているのである。

このA・レーモンドの「日本建築の基本原則」の「再発見」は、ブルーノ・タウトのように桂離宮や伊勢神宮でなく、初来日の際の横浜から東京までの道程の一般家屋にあった。『私と日本建築』(同書)の講演の「日本建築の原則」(1940年)に、A・レーモンドは1919年大正8年の大晦日に日本の汽船で横浜に到着したF・L・ライトに誘われて「帝国ホテル」の建築のために来日した。

1919年12月31日の、日本到着の夜、横浜から東京までの道、封建時代の名残りをとどめた狭い村を、車で通ったことを私は決して忘れることができない。その村々の道の両側には、しめかざりの環や、提灯がぶら下がった松や、竹が並んでいて陽気で、単純な喜びの雰囲気包まれていた。商店の道に向かって開け放たれ、売の人買う人共々、茶をすすり、火鉢に手をかざしながら親しげに坐っていた。派手な着物の若い人々は、道の真ん中に陣取って、いろいろ楽しそうな季節の遊びにふけり、私達の車は殆んど進めないほどであった。この15マイルに3時間半を要した忘れられない旅行の間に、私は日本の建築の最初の研究を始めた。(傍線筆者)

A・レーモンドは東京と横浜の間の未だ「村々」であるとする商店の開け放たれた風景を見て、新しい年を迎える庶民の陽気な生活に日本的空間つまり「風土」と「生きた現代建築」を発見している。そして「私はその時、現代建築と呼ぶものが、日本では無意識に実行され、生き続けて、守られていた、建築の“原則”であり、われわれはその失われた“原則”の知識を、意識的に回復させようと努力しているに過ぎないと気がついたのである。私は少しずつ、これらの“原則”がいかに物質文明という時勢に適用され、復興され得るかを学び知るようになった」と、この“原則”(“印 及び傍線筆者)こそ、レーモンドの建築を知る概念があり、A・レーモンドの「原語」はプリンシプルである。それを長谷川堯は、『建築 雌の視角』(相模書房 1973年)では「原理」と訳し、具体的には「荒あらしい仕上げ、新鮮な素材の香り、露出した木造構造体、そして自然にどっかりと根をすえてその中に埋没したような開放的な肌合い。」と形容している。そして伊勢や桂や日光に行かなくても神社建築や寺院建築ではなくて「村々」

の日本の庶民住宅の大工の作る生活空間への希求であった。その延長上にRD東京支社の建築の原点があることを実証してゆく。(傍線筆者)和辻哲郎の『風土—人間学的考察』(岩波書店1979年)には、日本の「家」の構造は、内部において「距てなき結合」を表現していて、それは日本民家の特徴であるとしている。

3. RD東京支社は「日本らしさ」の延長 — 「庶民住宅」—

A・レーモンドが「現代建築」(モダンアーキテクチャー)な建築、例えばこのRD東京支社のような表現を獲得できたのは、日本建築を通してである。

モダニストは、過去の建築様式の適合を否定し、仏教建築風の瓦葺きの勾配屋根をSRCの過去の建物に載せるような「伝統表現」を批判した。それは「過去の日本的なもの」であったからで、「日本的なもの」の存在やそれを表現すること自体を否定したわけではない。中国の影響を受けていない日本独自の神社、住宅、茶室(数寄屋)に注目したが、それはモダニズムの教義や美学に偶然に合致していた。つまりモダニストは、その中にモダニズムの教義や美学に合うものを見出し、それを「日本的なもの」としたのである。それを藤岡洋保は「建築における日本的なものの理解と表現」(『コア東京』 連載・建築史の世界・第3回 2019年4月号)において、モダニストの「日本的なもの」は「モダニズムのフィルターを通した伝統理解」(傍線筆者)だったわけである。藤岡は続けて、「真の日本的なもの」と見なされる近代建築は、実は「モダニズム」や「日本文化論」の影響下で成立したものだ」と判断している。

A・レーモンドは、1919年12月31日に来日し、横浜から東京までの間の村の両側の家々と人々を眼にして以後、「日本の建築の最初の建築を始めた」と、その日本建築との出逢いは、庶民住宅であったことは重要である。それが同じく来日した建築家のブルーノ・タウトとの大きな相違である。それは木造住宅の設計においてであり、A・レーモンドには木造による「近代建築」であった。最初から「日本的なもの」をコンクリートの「モダニズム建築」を通して、構築したものではない。「日本的なもの」として「芯外し柱」,「鉋状トラス」を使った。したがって、谷口吉郎や堀口捨己のように木造の白い直方体の「モダニズム建築」をA・レーモンドは全く設計しなかったのである。

4. RD東京支社の日本建築の影響について

A・レーモンドは、『リーダーズ・ダイジェスト』誌の1951年7月号の「新社屋建築の意図」を、設計者として、原理は古今のすぐれた西洋建築にもみられることだが、新社屋が日本の建築から借りた原理は、

日本の住宅や茶室、神社などの建築ほど、はっきりと、完全に、しかも美しくこれが表れる例はない。・・・日光と通風を最も上手に利用する方角、どこからでも自然が見られ、そして自然を屋内に招き入れるとでも言う、自然に接近したあり方、材料をできるだけ自然のままの姿で使うこと、・・・極度の単純さ、資材の節約、軽快で優雅な、ほとんどすきとおるような美しさである。すべてのものが六尺と三尺の単位でできている従来の日本建築の規模もRD社の新社屋は民主的、人間的であり、謙虚である。敷地は皇居のお堀と石垣の美しい門に面したすばらしい場所である。同じ永遠の原理に基づいて建てられた封建日本の技術の代表である皇居の門が近代アメリカ工学の良き例と向かい合っていることはまことに感慨深い。庭園はアメリカ第一流の彫刻家イサム・ノグチ氏が造ったもので、日本の庭園術に新しい血を注ぎこもうとする創造的努力である。

以上は建築誌でない『リーダーズ・ダイジェスト』誌の紹介文で、日米協力の作品であることを協調している。(図9、10、11)

私が入社数年後のある日、レーモンド設計事務所に休日出勤していたが、駐車場の窓と障子を開けて室内に顔を出し、「レーモンドさん居る」と声をかけてきたのが、私達が「イサムさん」と呼んでいたイサム・ノグチであった。直ぐに玄関の扉を開けてレーモンドのアトリエに案内した。

他のエピソードには、1970年11月25日に三島由紀夫が割腹自殺した日に、A・レーモンドはアトリエから急いで出てきて、「ミシマガハラヨキッタ」と呼びながらオフィスに出て来て興奮して叫んでいた。私が入社した数年後のことであった。A・レーモンドは最近の日本人には「大和魂が若い世代の中には無いと嘆いていた」ことを憶い出す。

(続く)